日刊 動労千葉

84. 12. 12

No.1815

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二(22)七二〇七

臨調・行革粉砕！　三里塚ジェット闘争勝利！

動労千葉一丸となって「60・3」を阻止する

第10回定期委員会 圧倒的成功かちとる

「全国の国鉄労働者の怒りと力を総結集して闘おう」
―中野委員長があいさつ―

動労千葉は十二月八日、労働者福祉センターにおいて第十回定期委員会を開催し、「60・3ダイ改」を突破口とする十万人首切り攻撃に対し、10・10三里塚～11・10国鉄労働者集会の圧倒的成功の成果にふまえ、三里塚、八五春闘等と結合させ、第二の「八一・三」を辞さず闘う方針を決定した。

あらゆる手段を駆使して闘う
―中野委員長あいさつ―

委員をはじめ多数の傍聴者がかけつける中で、十時、山口副委員長の「60・3粉砕の意志結集の場として委員会を成功させよう」との開会宣言で始まった。資格審査が行われ、委員会の成立が宣言された後、議長に幕張支部の滝口委員が選出された。

本部を代表してあいさつに立った中野委員長は、「中曽根の一月訪米に見られるように、戦後政治の総決算と称する反動政治を横行させている。三里塚に対する東峰裁判重刑求刑の弾圧、破防法裁での論告求刑強行、そして国鉄においては『三本柱』での団交打ち切り、雇用安定協約破棄通告、そして『60・3』というかってない合理化攻撃をかけてきている。ところが動労『本部』は中央委員会で、『国鉄を残すためには骨身を削って努力しなければならない』として、『三本柱に組織として対応する』ことを決め、『60・3』に対しては『要求がどれだけ通ったかが成果だ』として、裏切りを公然化させている。中曽根のペースにのっかり『国鉄再建』の名のもと、国鉄労働者に攻撃が集中している現実を直視し、怒りを結集して闘わねばならない。『60・3』にむけ、あらゆる手段を駆使して闘う決意であり、一丸となって闘いぬく方針をうちたててほしい」と述べた。

「60・3」粉砕に発言が集中

布施書記長から「経過報告」と「当面する取り組みについて」が提起され、西森交渉部長から「労働協約・協定締結について」が報告された。

議会開会中にかけつけた中江市議より、「日本の労働運動は敵の攻撃が激しくなると後退する。地域と労働運動の結合の重要性は増している。船橋の平和都市宣言を実現する」とのあいさつをうけ、質疑に入った。

発言は「60・3」に集中し、十人の委員、傍聴者から次の意見が出された。

- 「東京のり入れ」にかかわる線見について、
- 組合仕業を作成する場合、さしかえをしないと組めない点について、
- 超勤手当が支払われると△非がなくなるのか、
- 当局提案の線見日数は少ない。
- 労働時間の53分増は、健康・経済面でも問題が多い。
- 「60・3」粉砕のためにも三里塚を取り組むべきだ。第二の「八一・三」をかまえるべきだ。
- 6時間40分、一基準日当り乗務キロを達成する組合仕業をつくるのかどうか、
- 「八一・三スト」で動労千葉が団結を維持したが、「60・3」をどう位置づけるのか。
- 攻撃を見すえ、全力あげて自分達のダイヤをつくる。
- 「60・3」を国鉄労働者総体の問題としてとらえ、葛飾における国労共闘を進めている。
- すべての区で自主ダイヤを作成する取り組みは組合員の意識の高揚となる。

現場当局に要求をぶつけよう

以上の意見に対し、布施書記長より答弁を受けた。特に、答弁のしめくくりとして中野委員長は「当局の攻撃が動労『本部』革マルに助けられている政治の流れを変えていかねばならない。だから三里塚を闘い中曽根打倒を闘っている。内達対策委が作った仕業を支部で検討し、全乗務員の決起で現場当局に要求をぶつけていくことがカギだ」と提起し、全体の拍手でこれを確認した。

委員会宣言が片岡執行委員によって読みあげられ、拍手で採択された後、本委員会をもって特別執行委員を退任する重見津田沼支部副支部長と、新たに特別執行委員に就任した吉岡一前津田沼支部書記長よりあいさつをうけた。

最後に、水野副委員長より「仲間、組織を信頼し、動労千葉魂を発揮して闘おう」との閉会宣言をうけ、成功裡に委員会を終了した。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！